次の100年に向って

Toward Next 100 Years

沖　浩一

創立100周年という伝統を誇る相愛学園ではあるが，その中に開設されて3年しか経っていない創作演奏専攻は，その両者の歴史的尺度から見るとまだほんの誕生したばかりである。名門相愛に創作演奏専攻というコースが新たに設けられたという事で急激にその名は知れ渡りつつあるが、それでも尚現状では必ずしも充分に創作演奏専攻の存在とその目的必然性等が伝わっていない面があるのも又事実である。創作演奏専攻の卒業生を一年後に送り出さんとする，まさにこの時に相愛学園創立100周年記念論集が作成されんとする事は，創作演奏専攻にとってはその現状，将来への展望も含めて世間一般に向けて大いにPRする為には絶好の機会である。

1937年パリにおいて，Ondes Martenotという電気楽器が音楽界に参入して以来数多くの種類の電気楽器が登場して来たが，今日では，それらはアナログからデジタル方式に移行し，シンセサイザーやサンプラー，ミュージックコンピューター，又はそれらを結合して機能させるシステムであるMIDI（Musical Instrument Digital Interface）などへ進展して来ており大変賑やかである。現代の若者にとっては，それらの音は生まれた時からTVなどからごく普通の環境として耳にしており，子供番組では彼らの夢をかき立てるにはそれらは格好の道具であり，レーザー光線飛び交うSF宇宙映画には従来の楽器だけではものたりない。楽器店の電気楽器コーナーでは次々と出てくる新製品に彼らは群がるが，これは電子楽器への興味だけではなく，その価格も彼らの経済的射程内に入りつつあるという事も見逃がせない。今では10万円で手に入るシンセサイザーではあっても，それと同程度の機能を持ったものを15年前に求めるなら，数千万円はした。今後もその性能，価格とも確実に進歩していくだろう事は容易に想像できる。ウォークマンがそうであるように，なにも専門家でなくても，電子楽器を持つ事がファッションになりつつあるようにも思わせられる。又これらの若者はチック・コリア等の電子楽器を中心にしたバンドのコンサートのチケットや，CD，オーディオ機器などを手に入れる為の財布はしっかり準備されてい

るようだし，FM放送番組案内雑誌などで彼らの音楽への嗜好に対する触角は鋭い。シンセサイザー，コンピューター，サンプラー等の集合体である電子オルガンは，そのメーカーの主力商品となっている。

さてこの電子オルガンの普及率はピアノのそれに迫る勢いである。電子楽器メーカーにとっては，ピアノと違って電子オルガンは，3～4年にモデルチェンジを行なうことのできる大変魅力的商品である。エレクトロニクスの急激な発展に併ってそれは当然とも思えるが，それを購入する方にとってはそう度々のモデルチェンジは困った事ではある。いつピアノのように最終的決定モデルが出るのか待ち遠しいに違いないであろうが，エレクトロニクスの進歩が停止しない限り，電子オルガンのモデルチェンジも又停止出来ない。という事は電子オルガンは永久に変貌し続ける訳である。

一方楽器メーカーの付属音楽教室や専門学校，個人教室なども日本のどこの町にも見られるようになり，又そこから送り出される電子オルガン愛好者も毎年増えつつある。又それらの教室では彼らは音楽のジャンルにとらわれずひたすら自から楽しめればよい訳であり，その目的に供する為の曲集も頻繁に出版されているが，その音楽の質と量のバランスは必ずしも保たれているとはいえない。しかし，そのような教室に通う人達の中から，さらに高度に音楽を追求してみようと思う者が現れるのは当然であろう。彼らは単に電子オルガンやピアノ演奏だけでなく，作曲もしたいという新しいタイプであるが，その要望を満たしてくれる大学は，我が創作演奏専攻が開設されるまでなかったわけである。自分で作った曲を自からピアノや電子オルガンで演奏する事を追求できる四年制の大学は無かったので，やむなく彼らは，従来の作曲やピアノを専攻せざるをえなかった。電子オルガンの場合は，作曲か短大，専門学校の電子オルガンコースに行くしかなかったのである。

創作演奏専攻は現在電子オルガンとピアノの二つのコースを持っているが，何故二つのコースしかないのか，ヴァイオリンやSaxコースがあってもいいではないかという質問に対する答えは簡単である。そんなにいっぺんには出来ないだけの事である。しかし何故電子オルガンとピアノコースなのかの問いにはしっかり答えなくてはならない。ピアノやオルガンの鍵盤が現在のデジタル技術時代に対応しやすいという点もあるし，作曲する為には鍵盤楽器を弾きながらする方法が能率的でもある事も考えられる。ピアノが楽器の王様といわれパイプオルガンが楽器の女王様と呼ばれるように，事を興すにはまず王族を攻めるのが効率が良いという考え方も出来る。

ここで少しパイプオルガンと電子オルガンの関係について述べてみたい。パイプオルガンの音の質と量の豊富さについては改めていうまでもないが，電子オルガンの音色の数はもはやそれをもはるかにしのいでいる。電子オルガンの中のサンプラー機能は，世の中にある音全てを録音して再生するし，世の中にない音についてはシンセサイザー（音合成

器）がそれを受けもつ。又その音のクオリティについて議論する事は今や無意味になりつつある。まして価格の点になると全く論外である。しかし意外に意識されてはいないけれども大きな違いは，音量コントロール機能を受け持つエキスプレッションペダルの点についてであろう。これは音楽表現の幅を広げるという意味では楽器にとっては大変重要な点である。62年前にシェーンベルクの予言した音色メロディなども今では簡単に電子楽器はやってのける。電子オルガンは先人が到達した「一人の人間が多段鍵盤をあやつってこそ表現出来る演奏形態」すなわちパイプオルガン方式を，その外形だけはしっかり受け継いだが，しかしその中身はすっかり電気におき換えてしまったのである。そして今電子オルガンは楽器の女王II世としてその地位を確立しようとしている。いや実は正確にはIII世なのである。この話をするには，無声映画時代チャップリンの伴奏をするにはチャーチオルガンでは似合わないので，ふざけた音も出せるように改造したシャターパイプオルガンがII世であった……などと話さなければならないが，長くなるのでやめておく。

ここで少しだけ別の声にも耳を傾けておかなくてはならないだろう。「電子楽器のあのブザーのような音はまっぴらごめん」という声に対してである。その人にとっては，人間の創り出す芸術の中の最高のもの「音楽」だけは，あの不自然で忌まわしい電気に犯されてなるものか，という純粋な心の持ち主なのであろう。その人は今でも電子オルガンの音は，横断歩道に流れる「通りゃんせ」の音と思っているのかも知れない。たしかにあれは時々調律する必要があると思うが，しかしこれ以上この事について書くのは何んだか空しくなって来たのでこれもやめておく。

話を楽器の王様ピアノに戻そう。

ピアノは完成された楽器であるとは時々耳にする。ほんとうにそうなのだろうか。人類はついに神のごとく完全無欠，絶対的な楽器を作り上げたのだろうか。それともそんな大げさなものでなく，他のヴァイオリンやチェロ等と同じように，その物理的形態を守る限りにおいてはもはや改良する所がほとんど無くなっただけの事なのか。もしそうなら他の多くの古楽器のような存在になっていくのか。

しかしさすがは楽器の王様である。ピアノはそれが生まれた時には想像もしなかったであろうジャンルの音楽においてもなおひき続き重要な地位を占めている。このようなすばらしい王様にもチェンバロというI世がいた事は周知の事実である。ピアノがチェンバロには出来なかった音の強弱の機能を持つ事によりその地位を確保した事は，パイプオルガンIII世のエクスプレッションペダルの事と関連付けると興味深い。しかしそのピアノにも又，エレクトロニクスが入り込んで来つつある。フルコンサートモデルのようなすばらしい音が出てスペースもとらず，軽くて価格もアップライトピアノより安く，おまけにピアノ以外の音も出て，自動演奏も出来て等と説明するにも骨が折れるような電子ピアノの出

現である。ピアノはすばらしく完成された楽器ではあるがピアノの音しか出ない。ビブラートがかからない。アフタータッチがきかない。重くて持ち運びが出来ない。フルコンサートモデルは高価である，などと多くの欠点も又持っている。エレクトロニクスはこの点を確実に突いてくるであろう。というわけでチェンバロからピアノ，そして次の新しい楽器が生まれてくる可能性は充分にある。このチェンバロから見ればIII世の電子ピアノと先のパイプオルガンIII世である電子オルガンとを合わせて考えると，両者はちょうど仲良く音楽史上スタートライン上に立っている事が分かるであろう。

先の電気音嫌いの話はともかく，現実は電子音が確実に人々に受け入れられて来ているし，すでに我が創作演奏専攻がスタートしてしまっている。では我々はこれから電気を使ってどんな音楽を目指していくべきなのだろうか。今の電子楽器は既存の楽器のものまね楽器としては随分性能が良くなった。この調子で行けば将来は本ものの楽器より良い音（？）を出せるようになるかも知れない。最近オーケストラに渡す予算が無いので電子オルガンでそれを代用させてピアノコンチェルトを演奏するという例もよく見られるようになっている。これは少なくとも，ブザーの音よりはよくなった証しとも思えるが，ここで明確にしておかなくてはならない事がある。それは，いかに本もの音が出せるようになってもそれは便利であるというだけの事であり，音楽的に全く新しい別の価値があるわけではないということである。しかしそんなに難かしく考えないでも手軽にオーケストラの音が得られたり廉価に世界最高のフルコンサートピアノの音を楽しめるという事で，このような代用楽器としての役割りを今後も電気は果して行くだろう。又オーケストレーションの学習にも電子オルガンは便利であるし，作曲編曲にも大いに活用出来る。

しかしながら電子楽器は物真似機能以外の本来の音，つまり「電気の音」を当然ながら持っている。ちょっと前はブザーどまりであったが，今ではそれよりは飛躍的に進歩し若者が現代のサウンドをイメージする時，この進化しつつあるブザーの音は無くてはならないものになって来ている。それらの音のイメージは具体的にどんなものなのかという事は，本質的に文字で言い表わす事は不可能であるのが残念である。電子楽器が従来の楽器と対等な位置を確保する為にはどうすれば良いのだろうか。その物真似機能を使ってクラシック音楽をやっていたのでは絶対に駄目な事は明白である。それはその電子楽器でないと表現出来ない独自の音楽を創り出し，且つ大勢の聴衆の支持を得る事である。聴衆の支持を得るという点については，昔と今の社会的形態とは関係無しに大変な事であるが，その事についての検討は別の機会に譲るとして，この新しい楽器で新しい音楽を創る事の大変さはピアノが誕生した時などを見ても分るが，電気で音楽を創るという事程の大きな変革は過去には無かった。

新しい楽器がその地位を確保してしまった後は，音楽の創造を作曲家と演奏家という分

業方式の方が効率が良いが(おたがいに一方のみに専念出来るという点で)、電子楽器はまだその形を急激に変化させながら進んでいるものだから，ここ当分は分業方式を採れなくて，作っては弾き，弾いては作るという作業をやらねばならないだろう（この作業の間に即興演奏の能力は自然に身に付いてくるのだけれども)。バッハ，モーツァルト，ベートーベン，ガーシュイン，それ以外の作曲家も偉大な作曲家でもあったが同時に演奏の大家でもあったし，即興演奏についても同様である。

このように考えてくると我が創作演奏専攻は，自作自演かつ即興演奏をするという音楽の原点にたちもどった方式を採用し，その上にそれらを電気を使って新しい音楽を創って行こうとする誠に欲張った又大変なコースである事がお分りいただけた事と思う。

相愛学園創立100周年にして創作演奏が誕生したという事は，次の100年は創作演奏専攻こそが担って行くのだという気構えでおります。